

研究課題 在宅医の早期参加による在宅緩和医療推進に関する研究
課題番号 H18・がん臨床・一般・003
研究代表者 千葉県がんセンター緩和医療科部長
渡辺 敏

1. 本年度の研究成果

がん治療施設側の問題として、当センターの改革を以下の様に推進した。早期からの緩和医療の提供体制の具体化、また在宅移行後の緊急時受け入れ体制の整備のため、緩和医療科と治療担当側との早期からの併診態勢、緩和ケア病棟の緊急時受け入れ病床化、などの前年度の改革の強化に加え、今年度はさらに一般外来での緩和ケア供給体制の強化を企図して、緩和ケアチームを外来常駐とし、在宅支援機能をチーム内に保持させる機構に変革した。

在宅医の訪問診療遂行の易実現性構築のため、在宅医・訪問看護師・介護系職種・調剤薬局などに対する千葉県在宅医懇話会の活動が継続された。メイリングリストによる相談受付、専門医（スーパーバイザー）へのアドバイス伺い、多診療科医師による在宅併診、などの体制が整備され、また、2・3カ月に1回程度の教育研修活動も定着化した。

在宅緩和医療における「在宅医の早期参加」に関連して、在宅医ががん治療の一端を担う体制作りが必要と思われ、がん治療と関連付けた地域連携パスの構築を、一部の癌腫において推進した。さらに当センターの電子化カルテの担当在宅医との共有に関する改革も進化した。

在宅医療の優位性についての患者・家族を含めた一般市民側の意識改革については、一般支援団体および健康福祉センター（旧保健所）による公開講座開催、またその際のアンケート調査から住民側の意識調査が継続された。またそれらから得られた住民側のニーズに応えるかたちで在宅緩和ケア推進を企図した一般向けリーフレットが作成・配布された。

以上の研究、それに基づく改革により、千葉県がんセンターにおける在宅緩和ケア移行の促進態勢は進化した。さらに、本方式を県内の拠点病院（県内拠点病院を対象とした連絡協議会・在宅緩和ケア部会を設置）への普遍化を推進した。

2. 前年度の研究成果

今までの研究成果を踏まえ、がん診療専門施設からの緩和医療期患者のスムーズな移行のシステムが構築された（主任：渡辺）。在宅支援のための専属ナースを配置し、緩和ケア病棟からだけでなく、一般病棟から在宅への移行の推進が具体化してきており、このシステムを県内地域がん診療連携拠点病院へ普遍化する活動に結びついた。在宅移行後の受け入れる側の在宅医の底辺を拡大する方策も重要であり、千葉県在宅医懇話会が組織化され、活動が開始された。

健康福祉センター、患者・家族会らによる広報的活動、在宅医の周辺の整備としての看護・介護部門の良質化に関する研究も進行した。

3. 研究成果の意義, および今後の発展

がん治療施設側としての当センターの改革（早期からの緩和医療科の介入、在宅移行システムの良質化、緊急受け入れ病床の確保など）は順調に進行した。受け入れる千葉市周辺の在宅医側の底辺の拡大については今後のさらなる取り組みが必要であり、がん治療遂行途上からの地域連携パスの導入、および、地域的在宅支援センター構想の具体化を考慮していきたい。さらに拠点病院構想で責務とされる一般市民に対する相談支援機能の強化策として、体験者を導入した在宅緩和ケアの優位性に関する広報的活動も重要と判断される。これらを総合的に包括した地域的システムの構築が目標となる。

4. 倫理面への配慮

本研究の内容は、システムに関しての実情の調査から始まり、最終的には新たなシステムの構築を目的としたため、倫理面における逸脱の可能性はなかったと判断している。一部においては事例検討的研究がなされたが、個人を特定できないことに十分な配慮を持って遂行した。

5. 発表論文集

- 1) 渡辺 敏. 緩和医療センター・在宅緩和ケアの推進. 竜崇正編. がん診療ハンドブック. 東京：永井書店. 2008：70-71.
- 2) 大岩孝司, 鈴木喜代子. 肺癌 より良い在宅終末期医療を進めるために. Medical Practice 25(1)：.97-102, 2008
- 3) 大岩孝司, 鈴木喜代子. がんの在宅緩和ケア終末期ケア—自律支援の視点から— . 癌と化学療法. 投稿中
- 4) 木下寛也. 緩和医療と家族ケア 家族の症状理解を促すアプローチ . 緩和医療学 10(4)：366-369, 2008
- 5) 星野奈月, 木下寛也. がんのチーム医療 抗がん治療中からの緩和ケア医の参加. 隔月刊腫瘍内科 2(4)：314-321, 2008
- 6) 木村秀幸, 辻尚志. 院内緩和ケアチームの現状と問題点. 緩和医療 14(1)：37-52, 2007
- 7) 柴田岳三, 金澤登貴子, 伊藤真紀, 西村健太. がん診療連携拠点病院における疑似デイホスピスの試み. ホスピスケアと在宅ケア 16(2)：125, 2008
- 8) 藤田敦子. 揺れる患者・家族は何を求めているのか. 月刊ケアマネジメント. 10(4)：26-28, 2008
- 9) 藤田敦子. 緩和医療における家族ケア—家族の立場から—. 緩和医療学. 10(4)：56-61, 2008
- 10) 伊東洋, 奈良林至. 埼玉医科大学国際医療センター精神腫瘍科の取り組み・緩和医療医の立場から. 精神医学 49(9)：951-953, 2007

6. 研究組織

①研究者名	②分担する研究項目	③最終卒業校・卒業年次・学位及び専攻科目	④所属研究機関及び現在の専門(研究実施場所)	⑤所属研究機関における職名
渡辺 敏	研究統括	北海道大学、S50 卒、 医博、緩和医療学	千葉県がんセンター 緩和医療科	部長
大岩孝司	在宅医療研究・実践	千葉大学、S47 卒、 緩和医療学 呼吸器外科学	さくさべ坂通り診療所 在宅緩和ケア	理事長
木下寛也	精神腫瘍学的研究	金沢大学、H5 卒、 精神医学・緩和医療学	国立がんセンター東病院緩和ケア病棟医	医長
児玉賀洋子	行政部分担当	千葉大学、S53 卒、 内科学	千葉縣市川健康福祉センター	センター長
関谷雄一	病棟側緩和医療の研究	千葉大学、S59 卒、 放射線治療学	聖隷佐倉市民病院 緩和ケア病棟医師	部長
奈良林 至	在宅化学療法担当	山形大学大学院、H1 卒、腫瘍内科学	埼玉医科大学包括的がんセンター緩和医療科	教授
沖田伸也	在宅医療研究・実践	千葉大学、S55 卒、 呼吸器内科学	クリニック“あしたば” 在宅担当	在宅担当 医師
柴田岳三	病棟側緩和医療の研究	北海道大学、S51 卒、 医博、消化器外科学 緩和医療学	日鋼記念病院 緩和ケア病棟医師	緩和ケア科 科長
木村秀幸	病棟側緩和医療の研究	岡山大学、S47 卒、医 博、消化器外科学 緩和医療学	岡山済生会病院 外科、緩和医療科	副院長
大木信子	訪問看護研究・実践	千葉県立保健婦助産婦 専門学院、S50 卒、 保健師	匝瑳市民病院 在宅看護	看護部長 地域ケア部 長
河野秀一	介護支援研究・実践	淑徳大学社会学部、H8 卒、社会福祉学	渋谷区医師会ひがし健康プラザ地域包括支援センター、在宅介護	介護支援専門員
藤田敦子	NPO 活動	放送大学教養学部 H17 卒、生活と福祉	NPO 法人千葉・在宅ケア市民ネットワークピュア、福祉	代表